

関東地方のダムにおける観光イベント活動に関する基礎的調査

日本大学 学生会員 ○前田 智見

日本大学 正会員 仲村 成貴 荒巻 卓見

1. はじめに

近年、インフラを観光資源として活用する土木観光(インフラ・ツーリズム)への注目が高まっている。中根は土木の専門性と日常生活や社会とのつながりを伝えることがインフラ・ツーリズムにとって重要であると述べている¹⁾。河野は土木観光の観光資源として特に人気を博しているのはダムであるとの調査結果を報告している²⁾。そこで、インフラ・ツーリズムの主目的は一般の方々にインフラ施設の価値を認識してもらうことにあるとの観点から、本研究ではまず関東地方に所在するダムで実施されている観光イベントの開催状況について調査した。さらに、最も活発に活動に取り組んでいる宮ヶ瀬ダムに注視して現状を把握した。

2. 関東地方のダムと観光イベント活動

関東地方に所在するダムでの観光イベント活動を包括的に把握するため、本研究では表1に示す調査をまず実施した。島しょ部を除く関東地方1都6県(東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県、栃木県、群馬県)には、高さ15m以上のダムが163基存在する^{3),4)}。各ダム管理者のホームページ⁵⁾にて「活動」、「イベント」をキーワードとして、一般人向けの観光イベント活動を検索した。活動実績は55%にあたる90基で確認できた。ダム所在地を観光イベントの有無で分類して図1に示す。イベント活動とダムの所在地には相関は見られない。イベント活動の内容を図2に示す。「ダムカード」の配布が25%と最も多く、「ダム見学」が19%、ダムの写真や歴史についての「展示」が10%と続く。ここで、「祭り」とはダム周辺地域で開催されている祭りにダムのパネル展示等を実施している例であり、「ダム主体イベント」はダムの建設記念行事としてダム見学やダムカード配布、コンサート・ショー等、複数の企画を同時に開催されているものとした。なお、「その他」には流木・流木チップス、ダム湖見学、コンサート・ショー、ダム放流、ス

表1 調査方法と調査項目

調査項目	文献調査	インターネット調査
	ダムの所在地	活動の有無
	ダムの型式	活動日数
	ダムの管理者	活動内容
	ダムの使用目的	交通アクセス
	水系	
	河川	



図1 ダムの所在地と観光イベント活動の有無

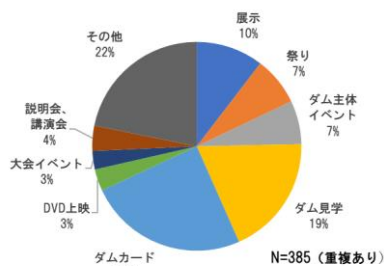


図2 実施されているイベント活動内容

ランプラリー等の単独イベントが含まれるが、いずれの割合も数%であった。各ダムで実施されたイベント開催日数とイベント活動数を図3に示す。活動数が多くても開催日数が少ないダムでは、単発のイベントが主として開催されている。活動数と開催日数が共に多いケース(継続して複数の活動を実施)は少なく、宮ヶ瀬ダムと小河内ダムが精力的な活動に取り組んでいることが確認できる。以降では、宮ヶ瀬ダムの活動に注視して考察する。

3. 宮ヶ瀬ダムイベント活動状況

国土交通省相模川水系広域ダム管理事務所（以降、管理事務所と称す）のホームページ上で確認できた、宮ヶ瀬ダムでのイベント活動数は34件であり、延べ3281日を費やして開催していた⁶⁾。中でも観光放流を最も頻繁に開催している。そこで、管理事務所に電話およびメールでヒアリングを依頼し、観光放流見学者へのアンケート調査結果等の情報を提供いただいた。2002年以降に実施された観光放流の年度別見学者数と実施回数を図4に示す。平日休日を問わず見学者数は増加しており、管理事務所によれば2018年には総数が90万人に達する見込みとのことである。同図より、休日より平日の方が見学者数は多いが、見学者数と観光放流回数がほぼ対応している。そこで、観光放流1回あたりに換算した各年の平均見学者数を図5に示す。1回の観光放流では平日より休日の方が見学者が多い。休日にはダムおよびダム周辺で他イベントが開催されていることも多いことから、他イベント開催の有無と観光放流見学者数との対応をまとめた。その結果を図6に示す。なお、2002年から2007年までは他イベント開催の有無や観光放流の見学者に不明な箇所があったため、2008年以降で評価した。休日の平均見学者数は、他イベント開催時は少なく、他イベントが開催されていない時は多い傾向がみられる。特に2016年と2017年でその傾向が顕著な理由として、管理事務所によれば、この2年間に宮ヶ瀬ダムが18のテレビ番組で取り上げられたことが要因の一つとして挙げられるとのことであった。ところで管理事務所が2017年10、11月に実施したアンケート調査によれば、観光放流見学者の同伴は夫婦や友人が34%に上り、来場目的としてダム資料館である「水とエネルギー館」や隣接する「県立あいかわ公園」を挙げた人が多かった。河野は、家族や友人との同行者は観光先への目的性が低い傾向にあると報告している²⁾。マスコミ報道や他イベントとの連携を通じた来場者の増加策はインフラ施設の注目度をより高めると考えられるが、ダム資料館への入館やダム見学への案内などをより活性化することで、インフラ・ツーリズムの主目的に繋がると推察される。

4. おわりに

本研究では、関東地方に所在するダムの活動状況

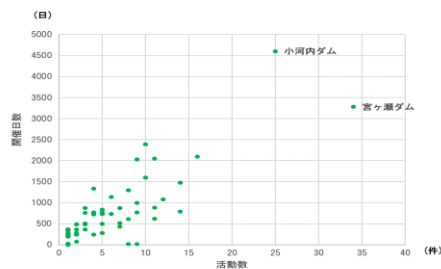


図3 活動数と開催日数

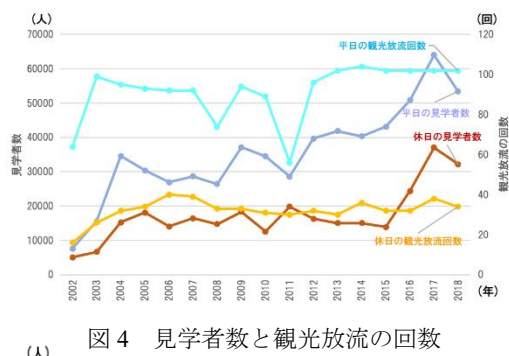


図4 見学者数と観光放流の回数

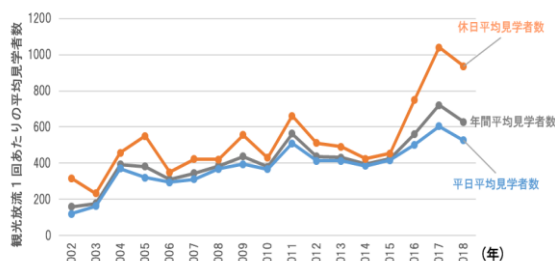


図5 平均見学者数

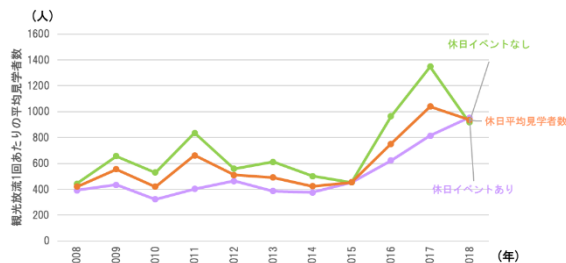


図6 休日イベント活動状況時の平均見学者数

を包括的に調査し、活発に活動されているダムに注視して現状を整理した。

謝辞 本研究では国土地理院の公開データを利用させていただきました。ヒアリング調査では国土交通省相模川水系広域ダム管理事務所の方に多大なご協力を頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

参考文献 1) 中根裕：土木観光への期待，土木学会誌，vol.99，No.6，2014，2) 河野まゆ子：土木観光はマニアだけのものなのか，sabo，Vol.120，pp.16-21，2016，3) 日本ダム協会：ダム年鑑2018，pp.58-75，2018，4) 国土交通省国土地理院：基盤地図情報サイト，<http://www.gsi.go.jp/kiban/>（2018年9月24日閲覧），5) ダムの各管理者ホームページ，6) 国土交通省相模川水系管理事務所ホームページ